

新 五條市史

文学文芸編



新五條市史

文学芸編

ごあいさつ

奈良県の南西部に位置する五條市域では、数万年前の後期旧石器時代から人類が活動し、悠久の歴史が刻まれてきました。平成十七年（二〇〇五）の旧五條市、吉野郡西吉野村及び大塔村の合併により新しい五條市が誕生し、吉野川・紀の川流域と吉野山地の多様な環境や豊かな文化を包摂した自治体となって、現在に至ります。

この五條市域の自然と歴史・文化を、さまざまな学問の研究手法で調査・探究し、その記録を後世に伝えるため、本市では平成二十九年度から市史編纂事業を開始しました。対象とする地域が広く、関連の分野も多岐にわたることから、多くの専門家の参画を仰ぎ、何よりも市民のみなさまのご理解とご協力を賜りながら、資料の収集、調査、分析等を進めています。

このたび、文学・文芸の分野に関する調査の成果として、『新五條市史文学文芸編』を刊行する運びとなりました。

古代の『古事記』『日本書紀』や『万葉集』、中世の『太平記』などの神話や歴史的なできごとの舞台として、五條はたびたび登場します。近世以降は、多くの市井の人びとが多彩な文芸作品を生み出しました。各地に伝わる昔話は、有名・無名の人びとの短い物語ですが、一見荒唐無稽な話の中にも先人の戒めや願いなどが込められているようです。

本書により、文学・文芸の世界にも五條の人びとの思いが息づいていることを、市民のみなさまをはじめ多くの方々に知っていただき、五條への愛着と誇りをより一層感じていただければと願っています。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、調査や資料提供にご協力を賜りました関係各位、また、監修・執筆にご尽力くださった研究者のご熱意に対し、心から敬意を表しますとともに深く感謝を申し上げます。

令和六年三月

五條市長 平岡清司

序

五條市は、平成十七年（二〇〇五）、古代の行政区「宇智郡」のほぼ全域を占める旧五條市と、同じく古代の行政区「吉野郡」に所属した西吉野村、大塔村が合併して現在の形に至りました。これに伴い、昭和三十三年（一九五八）に刊行された『五條市史』上・下巻、昭和六十二年（一九八七）に刊行された『五條市史』新修・史料編に続き、新しい市史の編纂が必要となりました。

一方で、紀伊半島の歴史文化研究が各方面で進み、五條市には、以前の市史とは違った視座がもちこまれました。

文学・文芸作品は、歴史資料とは異なり、人々の日々の生活や心情をそこに映し出します。

たとえば、平成十六年（二〇〇四）のユネスコ世界文化遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』の登録、令和二年（二〇二〇）の日本遺産『葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地』の認定に伴い、南に大峯修験道の吉野・熊野・高野山系、北に葛城修験道の金剛山系を仰ぐ五條市は、これら二大修験の聖地を結ぶ土地という側面に光が当てられることになりました。

修験者に扮してこの土地を往来する英雄たちと、五條の人々との関わりを物語世界に描いたのは、中世文学の軍記物です。

奈良県では、『古事記』完成千三百年に当たる平成二十四年（二〇一二）から『日本書紀』完成千三百年の令和二年（二〇二〇）までの「なら記紀・万葉プロジェクト」など、近年、歴史文化資源を多角的に活用する取組みが積極的に行われるようになりました。

これまで伝説であり文学であると分類されていた『古事記』『日本書紀』『万葉集』も、土地の歴史資料

と認識され、考古学や地誌の研究と重なることで、より立体的な土地の記録となりました。

記紀万葉の作者や製作時期と大きな関わりをもつ榮山寺は、往時の風を孕みながら、歴史と文学の出会い吉野川を、そこに見下ろしています。

平成二十二年（二〇一〇）、「五條新町重要伝統的建造物群保存地区」に選定された町並みは、俳諧や川柳、人形浄瑠璃や歌舞伎を愛した文化や、この町を旅した人々の旅の記録をたずねる上で格好の場所です。

平成十八年（二〇〇六）に国の登録有形文化財として登録された「藤岡家住宅」には、近代史、近代文芸史の中心人物たちと五條との関わりを語る文学・文芸資料が保存されています。

大塔町と西吉野町の口承文芸は、山と川と共に生きてきた五條の人々の「語り」こそが、自然の中に生かされていく未来へのヒントであると考え、若い研究者の視点を取り入れました。

新しく市史を編むにあたり、「文学・文芸」編が第一に刊行されるのは、既に調査済の資料を持つておられた研究者のご協力があったためですが、これから各分野で綴られていく『新五條市史』の、先達の語り始めという役割を頂いた一冊でもあります。

これまでの『五條市史』には記されていない資料を中心に編集しました。五條を知るために、以前の市史と併せてご活用いただければ幸いです。

令和六年三月

五條市史編集委員会

文学文芸部会長

川村優理

新五條市史 文学文芸編 目次

ごあいさつ 五條市長 平岡清司 i

序 文学文芸部会長 川村優理 iii

目次 v

凡例 ix

第一章 古代の文学

第一節 神武天皇東遷伝承と阿陀の鵜養

—『古事記』・『日本書紀』の中の宇智郡— 3

はじめに 3

一 『古事記』に描かれた古代の宇智郡 4

二 『日本書紀』に描かれた古代の宇智郡 6

三 鵜飼が伴—久米歌の中の阿陀の鵜養— 7

四 鵜養の文化 8

五 阿太の別と鵜甘部首 12

六 古代宇智郡の隼人 14

七 井氷鹿と石押分之子 17

—国栖を中心にして— 17

八 始祖土中出现神話と隼人 19

九 畿内隼人の移住と実態 21

十 神武天皇東遷伝承の文化史的特徴

—馬匹文化との関連— 23

十一 熊襲から隼人へ—王権の時代観— 25

おわりに 27

—神武天皇の位置づけと阿陀の鵜養— 27

第二節 『万葉集』からみる五條 29

はじめに 29

一 五條市の万葉歌碑 29

二 「真土」の歌 31

三 「宇智」・「阿多」・「荒木」の歌 34

四 「丹生」の歌 36

おわりに 37

第二章 中世・近世の文学

第一節 中世の五條と文学 41

一 中世五條の武士を語る軍記物 41

(一)『保元物語』／(二)『太平記』

二 中世五條を語る説話 45

三 中世五條を詠んだ和歌 47

第二節 五條を描いた近世文学

はじめに	49
一 雑俳	49
二 俳諧	53
三 和歌	55
四 狂歌	57
五 紀行・日記	58
(一)『諸州南遊記行』／(二)『甲午春旅』／(三)『西遊紀程』	
／(四)『大和巡日記』／(五)『吉野の道の記』／(六)『癸丑遊歴日録』／(七)『蘭笠のしづく』	
六 漢詩文	63
七 浮世草子・戯曲	66
八 民俗芸能・踊歌	67
(一)惣谷の狂言／(二)篠原踊	
九 軍記	68
(一)軍記に見る松倉豊後守重政像	

第三章 近代の文学

第一節 藤岡玉骨をめぐる文学活動を中心に

一 藤岡玉骨の文学活動について	73
二 新詩社への入社と「明星」時代の短歌	74
三 地方文芸誌「敷島」の同人としての活躍	76
四 「スバル」時代の短歌	80

第四章 現代の文学

第一節 川村たかしの文学活動

五 「冬柏」時代の短歌	81
六 「ホトトギス」「かつらぎ」時代の俳句	84
七 与謝野夫妻との交流	85
八 石川啄木との交流	91
一 子どもの文学から	97
二 『新十津川物語』	99
三 後につづく人たちへ	102
四 『サーカスのライオン』	106

第二節 戦後の文学・文芸活動

一 俳句の活動	112
二 短歌の活動	114
三 川柳	115

第三節 町と物語の関係

はじめに	117
一 伝承の読み方	118
(一) 主な登場人物たち	
山中の乙姫様／狼の被害と守護／河童の恩返し／英雄た	

ち／「しなかった」英雄たち／自ら居場所を決める神・
地蔵／役小角／井上内親王／弘法大師／義経と弁慶／後
醍醐天皇

(二) 風習

禁忌／雨乞い／占い／その他

(三) 考察

二 伝承の形

おわりに

資料

湯仏／天皇の間／滝壺の主／血の出る木／弘法大師と狩場	133
明神／寄足／シバシの寺の底なしの井戸／御園の由来／内	132
親王の白／安生寺／井上院／土合寺の古井戸／丹生神社／	130
雷伏せの八幡宮／竜のお寺／行者はん／野原助平の墓／鶯	
井／竜宮窟／迫（瀬）の堂薬師／米安地蔵／縁結び地蔵／	
雨乞いの効験／天王様と胡瓜／雨降り不動／今弁慶／金剛	
山伝吉／岩橋／源九郎の芝／曲り淵の馬の足跡／米高岩／	
法華一字一石塔／弁慶の足跡／地福寺の天壺／竜登りの松	
／五鬼の面／長慶天皇御頭巾／釣鐘松／つか地蔵／八軒	
台／えびすいで／さらし地蔵／庚申堂の柿の木／大師井戸	
／夜中の地名／かさがみさん／馬の足跡／馬かくし岩／南	
山の稲荷／丹生神社／乙姫淵／朝がい・古椀の由来／大師	
井戸／連子滝／常楽院の薬師如来／桃の実らぬ所／姫谷池	
／横ぐら／老野の由来／神野の由来／大師風呂／弁慶岩／	
牛つなぎ／地蔵堂の紅提灯／二百十人塚／城山／源十郎橋	

／女が通れぬ道／黒淵は四十八淵／乙姫淵／乙姫淵の大蛇
／弘法井／蚊のいない所／八幡太郎の薬師／矢降ろせ坂／
春日神社の御神体／イモの絶えない所／流れついた地蔵尊
／ひかり堂／宮屋敷／畠山の刀／黄金千枚の埋蔵地／天降
り地蔵さん／義経天へ上る／乗専法師最期の地／ねじ草／
小判を埋めた大平／はかまの由来／亀石とひばかりの蛇／
ガタロの恩返し／篠原の天神さま／岩よけ地蔵／クサビラ
の予兆／窟不動／南天の森／光円寺のお釈迦さま／国王神
社／歩き地蔵／源五郎ヒノキ／神さまが宿る木／のづち
／久太郎石／桶川の滝／九百九十九の谷／つぼ桶谷の弘法
井戸／蒔かず菜／宮の滝／岩屋の金の杯／神乗り石／ムギ
のフンドシ／ノコギリ堂／ウチコシと十郎迫／そえ谷とそ
げ谷／篠原踊りと狼／キツネにだまされた子ども

雀孝行／水ひよろ不孝／水ひよろ不孝／水ひよろ不孝／
十二支の由来／蛇賀（菖蒲湯の由来）／とつつくひつつく
／和尚と小僧（ぼいとこな）／引っぱり屏風／篠原の由来
／篠原踊りの由来／川さき踊りの由来／ガタロウと錦草／
ガタロウと錦草／伯母ヶ峰の三本足／矢嶋大明神の由来／
光円寺の墨塗り仏／淵の主／厄神払いの由来／狼帰り／手
斧取り淵の由来／手斧取り淵の由来／手斧取り淵の由来／
天川の十一の釜／去ねん迫／鏡岩／閉倉／酸漿に変わった
御飯／弘法清水（閉君）／弘法清水（閉君）／弘法清水（閉君）
／弘法清水（閉君）／弘法清水／弘法清水（乗鞍岳）／弘
法清水（乗鞍岳）／弘法清水／弘法清水（壺桶谷）／弘法

とやに桃／弘法と柿／弘法と中原の種無し柿／弘法と中原の種無し柿／弘法と下市の柿／弘法と蒔かず菜／弘法と百足／弘法の手形石／弘法と岩屋不動／弘法と音無川／高野谷／弘法と霧／弘法と蔵王さん／天川に草小屋の無いわけ／弘法と「朽」姓の由来／側垣家の由来／待て乳膏／弘法と簾の岩窟／狐の祟り／狐に化かされた話／狐に化かされた話／狐に化かされた話／狐に化かされた話／狐の嫁入り／砂まき狸／狸に化かされた話／狸に化かされた話／ガタロウの話／ガタロウの話（石数え）／ガタロウの話（相撲）／ガタロウの話（御仏飯さん）／狼の話／伊勢詣りと狼／狼の子守り／送り狼／送り狼／送り雀／人魂の話／損保の地蔵

参考・引用文献一覧	173
-----------	-----

参考資料

一 五條市内の歌碑について	183
二 藤岡家住宅所蔵の藤岡玉骨史料について	208
三 川村たかしの直筆原稿について	263
執筆者一覧、協力者及び写真提供者一覧	305
委員一覧、事務局	306

凡例

一 概要

- ・本書は、『新五條市史 文学文芸編』で、本市における古代から現代までの文学・文芸について解説した分野編である。
- ・執筆者名は文末に明記し、分担を巻末に記した。
- ・本書の編集は、五條市史編集委員兼文学文芸部会長・川村優理の監修のもと、五條市教育委員会事務局文化財課市史編纂室職員が実務に当たった。

二 表記

- ・一部の専門用語や、人名・地名などの固有名詞などを除き、原則として常用漢字・現代仮名遣いを用了。また、固有名詞や歴史的用語、難読と思われる語句に適宜ふりがなを付している。なお、ふりがなについては、複数の読み方があるものもあるため、一例と考えていただきたい。
- ・年表記は、原則として「和暦年（西暦）」の形で記した。明治五年（一八七二）十二月三日の改暦以前は太陰太陽暦に基づき、その後は太陽暦に基づく。なお、南北朝時代については、南朝・北朝の年号を併記した。
- ・歴史的な地名は、原則としてそのまま表記し、必要に応じて現在地を記載した。
- ・表現について、話者の語り口を生かすため、あえて話し言葉にしたところもある。
- ・文中には、現在の人権尊重の観点からは問題になる表現等がみられる場合もあるが、当時の社会状況等を示す事実としてそのまま掲載した。

三 図表写真について

- ・各章節には必要に応じ、図表・写真を掲載した。

四 その他

- ・本文の記述に当たり、多くの論文・著書などを参照・利用させていただいたが、一般を対象とする自治体史の性質上、原則として本文中には逐一示さず、巻末の参考・引用文献一覧に一括して記載した。
- ・本書の著作権は、執筆者もしくは五條市にある。本文・図表・写真の無断掲載は、堅く禁じる。
- ・本書の協力者・写真提供者は、巻末に記載した。ここに謹んで感謝の意を表します。

〈表紙写真〉

五條市西吉野町川岸の丹生川（五條市観光協会フォトコンテスト入賞作品「春の清流」）

第一章

古代の文学

第一節 神武天皇東遷傳承と阿陀の鵜養

—『古事記』・『日本書紀』の中の宇智郡—

はじめに

『古事記』は、奈良時代の和銅五年（七一二）に太安万侶が四十二代元明天皇に撰進した、わが国における現存最古の歴史書である。三巻よりなるが、上巻は神話、中巻は初代神武天皇から十五代応神天皇まで、下巻は十六代仁德天皇から三十三代推古天皇までの事績を記している。

成立の経緯は、その「序」（もとは編者太安万侶の上表文）から、三十九代天武天皇が「帝紀の撰録」・「旧辞の討覈」を企画し、舎人の稗田阿礼にそれを誦習（暗誦ではない）させたことに始まるが、天武天皇が崩御して中断したことが分かる。帝紀は天皇の系譜や主な事績、旧辞は神話や歌謡を中心にした物語的な内容であり、太安万侶は天武朝以来、未完のまま残されていた原稿に若干の手を加えて四か月余りで完成させた。

『日本書紀』も、同じく天武天皇十年（六八一）に編纂が開始され、養老四年（七二〇）に舎人親王が四十三代元正天皇に奉献した、わが国最初の正史である。全三十巻からなり、第一巻から第二巻までは神話であり、第三巻から第三十巻までは神武天皇から四十代持統天皇までの事績を編年体で記載している。なお、『古事記』・『日本書紀』は、以下『記』・

『紀』と略記する。

さて、古代の大和国宇智郡（ほぼ奈良県の旧五條市）地域のことは、いずれもその神武天皇の行に記されている。

神武天皇についての『記』・『紀』の所伝は、かつては事実を伝えたものと受け取られたこともあったが、今日では事実を伝えた物語であるか否かは定かでなく、後世の何らかの出来事をもとに初代天皇の物語として述作された虚構の作品である可能性が高いと解するのが一般である。したがって、その研究は、後世のどのような出来事にもとづいて述作されているのかという視点から、両者の類似点を比較、探究する方法が主流を占めてきた。

しかし、この反映法による考察では、類似の出来事が複数存在すれば、いずれもがそれに該当する可能性が存在するか、提示された説の妥当性は自ずと低くなる。事実、ここで取り上げる神武天皇東遷傳承に関しては、時期と出来事を違えた複数の反映説が唱えられている。反映法に基づいた研究には限界があり、他に有力な傍証が示されない限り仮説の域を出ることはない。

したがって、こうした立場からの研究に対しては、「物語を作為することは比較的容易であろうが、それが伝承としての価値をもつようになるためには、社会がそれを受け容れるだけの手続きが必要である。……物語のようなものの内容と、その時代の政治的事件とを、直ちに対応させようと試みるのは、その方法の誤った適用であろう。」という批判もある。

もちろん、初代天皇に関することであるから、所伝の史実性を追究することは困難であるが、然りとてここで従前の反映法に依拠して考察を進めることにも躊躇される。

こうしたことから、ここでは必然的に所伝自身の内部的な分析と考察に限られてくるが、神武天皇東遷伝承自体が歴史的存在であるから、当然その形成や構成、時代的特徴についての考察では、文化史的、歴史学的視点に依ることになる。なお、課題の性質上、記述は『記』・『紀』の神話にもおよびが、神話学上の考察については割愛する。

一 『古事記』に描かれた古代の宇智郡

『記』・『紀』の神話によれば、神話上の天上世界である高天原から、天照大神の孫の邇邇芸命（『紀』は瓊瓊杵尊、以下同じ。天忍穗耳命の子）が地上世界である葦原中国の、竺紫の日向の高千穂の久士布流多氣（日向の襲の高千穂峯）に天降った。その子が日子穗穗手見命（彦火火出見尊）、その子が鵜草葺不合命（鵜草葺不合尊）、その子が神倭伊波礼毘古命（若御毛沼命・神日本磐余彦火火出見尊・彦火火出見命、ヒコホホデミは祖父と同名）、すなわち神武天皇である。

鵜草葺不合命までの三代は南九州の日向（宮崎県・鹿児島県）に留まったが、神武天皇は東方に向けて日向を出発、瀬戸内海を東進し大阪湾を経由して熊野に南下、上陸して大和（奈良県）に入り畝火之白橿原宮（橿原宮）に即位するま

での物語を、神武天皇東遷（あるいは東征）伝承と称している。その神武天皇東遷伝承に、古代の大和国宇智郡地域のことが登場する。

ところで、今日の大阪平野の上町丘陵東部から生駒山地西麓までの間には、古代には淀川と大和川が流入する汽水湖である、河内湖が広がっていた。瀬戸内海を東進した神武天皇の一行は、大阪湾から河内湖の東岸に進み、日下（大阪府東大阪市日下）に上陸して、山越えで大和に入ろうとした。ところが登美能那賀須泥毘古（長髓彦）の激しい抵抗にあつて断念し、紀国（和歌山県）を経由して紀伊半島南部の熊野村（三重県の南端部）から上陸した。ここで高木大神（『紀』は天照大神）は、神武天皇の大和入りの先導役として八咫鳥を派遣した、とある。それ以後は次に読み下し文で示すが、引用は日本古典文学大系本による。なお、一部でルビを加除し、へんは原文が小字割書である。

「今、天より八咫鳥を遣はさむ。故、其の八咫鳥引道きてむ。其の立たむ後より幸行でますべし。」とまをしたまひき。故、其の教へ覚しの隨に、其の八咫鳥の後より幸行でませば、吉野河の河尻に到りましし時、筌を作せて魚を取る人有りき。爾に天つ神の御子、「汝は誰ぞ。」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は贄持之子と謂ふ。」と答へ曰しき。へ此は阿陀の鵜養の祖。其地より幸行でませば、尾生る人、井より出で来りき。其の井に光有りき。爾に「汝は誰ぞ。」と問ひたまへば、「僕は国つ神、名は

第二節 『万葉集』からみる五條

はじめに

『万葉集』は、奈良時代に成立した歌集で、現在日本に残っている中では最古のものである。

舒明天皇のころ（六三〇年ごろ）から七五九年まで、およそ一三〇年の間に詠まれた歌が収められている。『日本書紀』『続日本紀』に記載された時期とも重なっており、共通した歴史をうかがうこともできる。一方で、声に出された「うた」として独自の性質をもっている。歴史書が過去を振り返っているのに対し、歌集はその時の「今」が残されているといえる。『万葉集』の歌、そのときの「今」において、五條の地がどのように詠まれているのか。

本稿では『万葉集』に現れる五條の歌について近年の研究成果を踏まえ解説したい。

一 五條市の万葉歌碑

奈良県内には二三〇基以上もの万葉歌碑がある。各市町村が観光のため歌碑を活用しており、五條市も例外ではない。五條市に設置されている歌碑の現時点の情報をまとめておきたい。五條市観光協会Facebookによると、「五條市の主な万葉歌碑」として次の五首六基が紹介されている。なお、歌の解釈については、次節以降、詠まれた場所ごとに順に取り

上げる。

- ①阿太人の 梁打ち渡す 瀬を速み
心は思へど 直に逢はぬかも

（卷十一・二六九九）

（前川佐美雄 書）

場所…五條市南阿田町 非公開

- ②真葛原 なびく秋風 吹くごとに
阿太の大野の 萩の花散る

（卷十・二〇九六）

（橋本紫閣 書）

場所…五條市大野新田町（阿田峯八幡宮内）



阿田峯八幡宮の万葉歌碑

- ③（歌は②と同じ）

（阿波野青畝 書）

場所…五條市西阿田町八四四（行圓律寺裏山）

④たまきはる 宇智の大野に 馬並めて
朝踏ますらむ その草深野

(巻一・四)

場所…五條市今井町荒坂峠 (武者小路実篤 書)
(荒坂池付近)



荒坂峠の万葉歌碑

⑤斯くしてや なほや守らむ

大荒木の 浮田の杜の 標にあらなくに

(巻十一・二八三九)

(鹿兒島寿蔵 書)

場所…五條市今井町九〇五 (荒木神社内)

⑥あさもよし 紀人羨しも

亦打山 行き来と見らむ 紀人羨しも

(巻一・五五)

(水原秋桜子 書)

場所…五條市釜窪町 (国道二四号真土峠手前)

これらに加え、同じ五條市観光協会が提供する五條市の観光案内「GOJO MAP」には、

⑦苦しくも 暮れゆく日かも

吉野川 清き川原を 見れど飽かなくに

(巻九・一七二一)

(五條市小島町五〇三 栄山寺境内)

も挙げられている。

また旧阪合部小学校(令和三年三月三十一日をもって休校)のホームページに「阪合部の万葉歌碑」が挙げられている。

⑧あさもよし 紀伊へ行く君が

真土山 越ゆらむ今日ぞ 雨な降りそね

(巻九・一六八〇)

⑨白栲に にほふ真土の 山川に

我が馬なづむ 家恋ふらしも

(巻七・一一九二)

⑩あさもよし 紀伊人羨しも

真土山 行き来と見らむ 紀伊人羨しも

(巻一・五五)

(⑩の歌は⑥と同じ)

これら⑧～⑩は五條市相谷町に位置しているものである。当時の大和から紀伊へのルートは、現在の国道とは異なり、相谷町を通っていたことが指摘されている。

以上見たとおり、五條市内の万葉歌碑は八首十基を数える。

第二章

中世く近世の文学

第一節 中世の五條と文学

一 中世五條の武士を語る軍記物

古代律令国家制度の下、五條は「畿内」という一つの行政的統一圏に位置する場所として機能した。平安京に都が移った後の中世になると、律令地方行政の制度は次第に緩み、地方の領主らが自衛のために武装したことに始まる武士が力を得る。

中世の五條では、各所に在地の武士集団が館や城と呼ばれる居住を構え、その勢力は分権化していた。こういった形の地方政治の特性として、歴史資料と分類できる文字情報が少ないのは当然で、土地には館や城の跡があるものの、そこに誰が住まいしてどんな動きをしたのかが曖昧で、不明確なままになっていることが多い。

これを補うのが中世文学である。正確な歴史的事実の記録ではないが、当時の人々の思想や、生活、中世五條の土地の姿を知る材料という意味で、文学・文芸作品を見逃すことはできない。

(一) 『保元物語』

『保元物語』は、鳥羽法皇崩御の後の皇位継承をめぐり、崇徳上皇派と後白河天皇派が対立した保元の乱（保元元年／一一五六年）を素材にした軍記物語である。作者は未詳。鎌

倉時代初期の成立とされながらも、琵琶法師によって語り継がれたため、年月を経て内容が変容した。

『保元物語』に、大和国宇野の郡（五條市宇野町）に住む大和源氏の武士宇野七郎親治の話がある。宇野七郎は左大臣藤原頼長の召しに応じ、上皇方の武士として保元の乱に参戦した。

『保元物語』より、宇野七郎親治が、崇徳上皇方の陣に援軍に向かう途上、京都東山にある法性寺の付近で、対立する後白河法皇方の平基盛一行に出会う場面。

(抄訳)

— 安芸判官平基盛（平清盛次男）が百騎を引き連れて宇治路の防備に向かうと、法性寺のあたりまで来たとき、大和の方から総勢三十余人の武者がやって来る。基盛は、「あなた方はどこへ行き、どちらの方への手勢を差出そうとなさるのか。小生は、基盛と申す。宇治橋を防備せよという宣旨を受けて参上するところだ。もし、あなたが宮中へ参向するならば、この基盛に同行されよ。さもなければ、ここを通すことはできない。」と、声を掛けた。

「当方は大和国の住人、宇野七郎親治。左大臣殿のご命令で新院の元へ参るところだ。」

と答えると、基盛は、

「安芸守平清盛の次男、安芸判官平基盛が宣旨を受けた御使者として来ている。こちらに従わないなら、ここを

通することはできない。」

と言う。親治は馬の手綱をたぐり寄せ、

「摂津守源頼光の弟、大和守頼親の子孫、中務承頼治の孫、
せつつかみなもとのらいつう やまとのかみよりちか なかつかのじょうよりはる
しもうごんのかみちかひろ

下総権守親弘の子で宇野七郎親治と申す。大和国宇野の地に多年にわたり住み着き、いまだに武勇の名を落としたことはない。源氏は二人の主君をいただくことはない。宣旨の命だからといって、宮中へは参らぬ。」

と、通り過ぎようとしたが、基盛の兵士が親治たちを取り囲み、からめ捕ろうとするので、親治勢は、馬の鼻を連ねてくつばみを並べ、大声をあげて基盛勢の中へ突入し、基盛の郎等を蹴散らした。

これは、容易ならぬ敵。安芸判官は十九歳とまだ若いけれど、賢明な策をとった。

高い所に上がって親治の後に続く勢がないことを確認して部下に命じた。

「この軍勢しかいない。生け捕りにしろ。」

宇野七郎ら十六人はこうして捕まり、天皇に奏上されたところで、西の獄舎に投獄された。

平基盛はその功績により、まだ十代の若さで天皇の側近である蔵人に任ぜられることになった。――

(二) 『太平記』

『太平記』は、後醍醐天皇即位から始まり、建武の新政、鎌倉幕府の滅亡、室町幕府の成立、三代將軍足利義満の時代

まで、南北朝の争乱の時期の内のおよそ五十年間を背景にして書かれた物語である。複数の作者によって書き継がれ、中世には「太平記読み」という『太平記』を朗読し、講釈する物語僧などによって語り伝えられて、それが起源となって江戸時代には講談に発展した。

和 暦	西 暦	出 来 事
元弘二年	一三三二	十一月、大塔宮吉野にたてこもる
(北) 建武三年 (南) 延元元年	一三三六	後醍醐天皇が京を追われ吉野に逃れる途中、穴生の堀家に立ち寄る。宇智・吉野郡の武士の多くは南朝につく。南北朝時代の始まり
(北) 貞和四年 (南) 正平三年	一三四八	吉野の行宮陥落。後村上天皇は穴生に入る
(北) 観応三年 (南) 正平七年	一三五二	「穴生」を「賀名生」に改める勅書
(北) 文和三年 (南) 正平九年	一三五四	後村上天皇が賀名生を引き払う
(北) 康暦元年 (南) 天授五年	一三七九	南朝長慶天皇が榮山寺に行宮を置く(一三三八)
(北) 明德三年 (南) 元中九年	一三九二	南北朝合一

『太平記』で、中世五條の武士たちは、後醍醐天皇、護良親王ら南朝方を支援して活躍する。

注目したいのは、元弘の変の失敗のため、後醍醐天皇の皇子大塔宮(還俗して護良親王)が山伏姿になって逃げ込んだ場所を『太平記』で十津川と記しているが、実は五條の大塔ではないかと考えられることである。

第二節 五條を描いた近世文学

はじめに

近世（江戸時代）の文学が、それ以前の文学と大きく違う点は、作品が出版され、不特定多数の読者に読み物として提供され享受されてきたことにある。これは、徳川幕府成立後の安定した社会の下で、三都（京・大坂・江戸）や各地の城下町、村々が開発され発展するに伴って、武士層にも施政を担う、また、台頭してきた庶民層にも社会に対応する、知識や教養が求められたことなどによる読者層の拡大がもたらした結果である。

当初に出版された本は、日常生活で必要とする実用的な知識を学ぶための書物であったが、次第に生活に潤いを与える文化的な教養を促す書物をも人々は求めるようになる。

そうした多様な書物への希求を受けて本屋が三都を中心に営まれるようになり、また、より安価に読者に本を提供する貸本屋も現れる。

それを促したのは、街道が整理されて人々の往来が活発になり、都市と地方との交流が、物品の流通だけでなく、文化的な面においても広がり、都市の流行が地方にも素早く伝播していったことにある。そのような近世になって盛んとなる俳諧や雑俳が端的に示している。宇智郡や西吉野村・大塔村の人たちにとっての文学的な営為も、身近な俳諧や雑俳の

享受に早くからうかがうことができる。

読み楽しむだけでなく作者として自らも参加する。読者即作者と容易になり得るのは、生活の一部として文学を受け入れた、近世の庶民文学の特質でもある。以下、作品のジャンルごとに、五條に関わる人々や五條地域への関心の、そのあり様をみていく。

一 雑俳

連歌から分離した俳諧之連歌と称する新しい文学様式は、近世に入って松永貞徳（一五七一～一六五二）の下で俳諧として独自の発展を遂げる。俳諧は、前句（五七五）と付句（七七）の二句（連句）を一座する人たちが交互に詠み、その付合を鑑賞する文学的な営みである。その方式として二句の付合を交互に連ねて百句で終える百韻形式を取るようになって、式目（規定）や作法が新しく定められ、宗匠（俳諧の師匠）の指導のもとに門流が形成され、新興の武士層や庶民層も楽しむところとなり、全国各地へと普及していく。

俳諧を学ぶには宗匠に入門するのが常道であるが、一方、宗匠に入門する前に、付合の技法を素養として身につけるといふ意味合いから、雑俳と総称する、二句の付合を競う前句付俳諧が万治年間（一六五八～六〇）頃からおこなわれるようになる。前句題を出して付句を応募（投句）させ、点者（優秀の判定者）が点（採点）をつけ、秀作を選び表彰する仕組みである。

投句料を添えた応募句は、会所と称する受付所で集められる。集まった作は点者に送られ、評価が付されて会所に戻され、会所から刷り物や冊子で優れた作が発表されるという手順がとられる。優劣を競うだけでなく、優れた作には景品が与えられるようになって、投句者も各地に及び、元禄期（一六八八～一七〇三）には千人を超える受付も珍しいことではなくなる。

投句料は何銭と安く、気軽な庶民の慰みとして、雑俳は前句付ほか数種の方式でおこなわれ、江戸時代を通じて流行する。

大和においても御所ごせに会所（清書所）が設けられており、貞門俳人鶴寿軒平野良弘が元禄九年（一六九六）十一月に、京都や大坂の俳諧師が選句する、会所本『高天鶯』たかまうぐいすを刊行している。同書には大和国を中心に摂津・河内・和泉・紀州と近畿一円から応募がなされており、五條住の人たちからも投句があり、入選した者もいる。左にその掲載句を示す（「」は前句題）。

『高天鶯』

「元のやうにはならぬものなり」

さび刀押して見れども焼薄し 五條一風

「跡に残るは上戸じやうこ也けり」

声たかき花見の山の夕間暮れ 五條一風（他に三句掲載）

「歩み心のよき拾時」

散り残る花をたづねて酒呑まん 五條桜水

「自由自在な春の曙」

匹如身すくすみや花ゆへ緑の惜しからぬ 五條粗工（他に一句掲載）

なお、良弘は『高天鶯』に続いて『俳諧替狂言』かわりきようげん（元禄十五年（一七〇二）閏八月刊）、『三番統』さんばんつぎ（宝永二年（一七〇五）五月序）を編集するが、各清書所は御所だけでなく、五條・名柄村（替狂言）、五條・忍海村（三番統）にも設けられている。五條・宇智郡からは次のような入選句がみられる。

『俳諧替狂言』

「草も木も野山大木にひろごりて」

いかぬ所はほつてやる船 宇知郡火打定次

「心ひとつの分る品くく」

兄姪も貧しき方ハ形迹うとまれて 火打一水（他に一句掲載）

「世の中は定なきこそ笑わらけれ」

つぶりも足も洗ふ居風呂すゑ 五條弥生

「いつも心が春で置たし」

来れバくるこぬから淋し吉野山 五條歌竹（他に一句掲載）

「世の中は定なきこそ笑わらけれ」

かい暮くれやひの乗合の船 五條半雲

「それくといふ間に物の違い也」

損計ばかりする年寄の恋 五條和風軒

（前出の一風も載るが省略）

『三番統』

「気味がよい是ハ聞ても気味がよい」

懸かけこひ乞こひ戻る跡の鶯 五條スへ随井

第三章

近代の文学

第一節 藤岡玉骨をめぐる文学活動を中心に

一 藤岡玉骨の文学活動について

五條市と近現代文学との関連からいえば、真つ先に「天誅組」を題材にした文芸作品を思いうかべることになるが、ここでは、五條市近内町ちかうちの登録有形文化財「藤岡家住宅」を生家とする藤岡玉骨ぎよつこ（本名は長和）の文人としての活動を取りあげたい。まず玉骨のプロフィールを紹介しておこう。

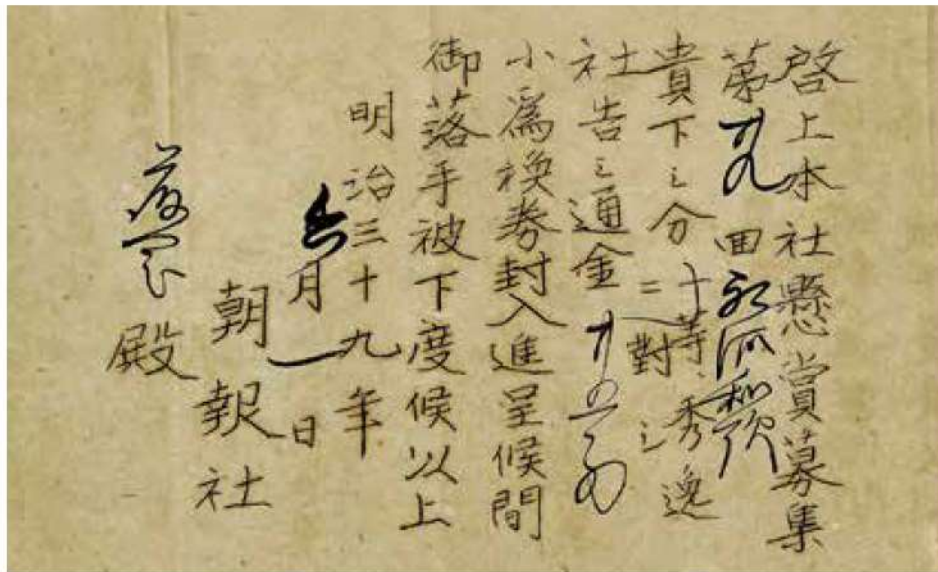
玉骨は、明治二十一年（一八八八）五月十三日に宇智郡近内村（現在の五條市近内町）の藤岡長二郎の長男として出生。藤岡家は江戸時代から大坂屋長兵衛と号する代々の庄屋で、父長二郎は宇智郡北宇智村の初代村長を務め、和歌山線の北宇智駅の開設に多大の尽力をし、千柳の号で俳句をたしなむ風雅の人でもあった。



藤岡玉骨 肖像
（『玉骨句集』）

玉骨は地元の北宇智尋常小学校（旧北宇智小学校）、五條高等小学校（現在の五條小学校）を優秀な成績で卒業後、旧制五條中学校（現在の五條高等学校）に進学し、旧制第三高等学校（現在の京都大学総合人間学部）を経て、東京帝国大学法学部政治学科を卒業。在学中の明治四十四年（一九一七）十一月に文官高等試験に合格し、卒業と同時に内務省に入つた。東京勤務は一度もなかったが、愛知、和歌山、兵庫、石川、長野、岐阜、徳島、兵庫の各県と京都府の内務官僚として勤務。佐賀、和歌山、熊本の三県の官選知事を務めて昭和十四年に退官した。その後、岸和田紡績、大日本紡績などの取締役のかたわら大政翼賛会大阪府支部事務局長を歴任。戦後は南都銀行などの取締役なども務め、昭和四十一年（一九六六）三月六日に満七十八歳で死去。官吏、実業家として手腕をふるうとともに、与謝野鉄幹・晶子夫妻に師事し、東京新詩社の歌人として活躍した。また高浜虚子きよこ主宰の「ホトトギス」の同人となり、戦後は毎日新聞「大和俳壇」の選者も務めた。著書に古稀記念の『玉骨句集』があり、昭和三十七年（一九六二）に奈良県文化功労賞を受賞。五條の栄山寺の境内に句碑「山めぐり巣を守るきぎす翔たせつつ」がある。交流した人物は、文学者の室生犀星むろうさいせい、文化学院の創始者の西村伊作、俳人阿波野青畝あわのせいは、民俗学者の南方熊楠みなかたくな、社会運動家賀川豊彦、建築学者の今和次郎こん、政治家の永井柳太郎など多岐にわたる。

その玉骨の文芸への関心は、五條中学校時代の明治三十七年（一九〇四）に博文館から刊行されたばかりの『紅葉全集』や『樗牛全集』を購読し、尾崎紅葉、高山樗牛の作品を愛読、謄写版刷りの同人雑誌を編集するところからはじまった。また俳句をたしなむ父に感化されて、古川芳翁の「金芳吟社」の月例会に参加していた。その玉骨が俳句に本気で取りくむ



朝報社入選通知書
(藤岡家住宅蔵)

ようになったのは、明治三十八年（一九〇五）九月に京都の第三高等学校に入学してからである。後年に大阪朝日新聞の論説委員として「天声人語」に健筆をふるった釈瓢齋（本名永井栄蔵）らと「満月会」という運座（うんざ）をつづけていた。さらに「藤岡家所蔵資料」には、第三高等学校の京都在住時代の明治三十九年（一九〇六）から四十年にかけて「萬朝報」の「読者文芸」や春陽堂発行の「新小説」の懸賞募集に応募し、朝報社や春陽堂からの入選を告知する郵便物が保存されている。その郵便物によれば、藤岡玉骨、藤岡長一、玉野骨人、前田（藤田）喜代子などのさまざまな名前で意欲的に短歌や俳句を投稿していたことがわかる。与謝野晶子が「萬朝報」の新派和歌の選者をはじめるのは明治三十八年十月からであるが、翌三十九年四月九日号に晶子の選による玉骨の短歌がはじめて一首掲載されている。

むさしの、野ばら咲くなり洋行の真帆のやうにもいと白うして

その後も玉骨は「萬朝報」への投稿をつづけていることからも、選者の晶子とのつながりが新詩社への入社に結びついたと考えられる。

二 新詩社への入社と「明星」時代の短歌

玉骨は明治三十九年十月に新詩社に入社し、翌十一月号の「明星」に玉骨の号で短歌四首がはじめて掲載された。

夕月夜すだれ捲きたる山の家はしぬの人にこほろぎの啼

第四章

現代の文学

第一節 川村たかしの文学活動

―奈良県の五條市は紀伊半島のへソである。

海へ、山へ、国中へ。道は均等にのび、人に個性は豊かで、町には貌がある。それゆえに、ぼくは五條が好きだ。 川村 たかし ―



川村たかし 肖像
(個人蔵)

一 子どもの文学から

川村たかし（本名 隆）は、昭和六年宇智郡牧野村（現・五條市中之町）で生まれた。奈良学芸大学（現・奈良教育大学）を卒業後、昭和三十年より、五條小学校で教鞭をとる。戦後、まだ子どものための読み物が少ない時代、雨が降って運動場が使えなくなると、本を読んでやることにした。『セロひきのゴースト』が好評であったので、宮沢賢治の童話を

続けて読み、ネタが尽きたので『夜明け前』を読んで聞かせたが、小学生には難しく、図書室にも本はあまりなかった。で、教室に文庫を作って家にあつた『シートン動物記』などを持ち込んだ。子どもたちの家からも本を集めて、文庫の本は、三百冊を超えたが、朗読をきっかけにして、本の世界に引き寄せられる子が増えていった。

教室で読んで聞かせる話もタネ切れになり、文庫の本も読み尽くされ、自分で子どもたちのための物語を書くうと思いついたのは、就職してから二年過ぎた頃であつた。

大学時代にも小説は書いていたが、童話は書いた経験はなかった。そんなとき、大淀町で時代にさきがけて児童のための創作文学を書くところとする花岡大学らのグループの存在を知って、五條の友人と二人、花岡を訪ねることとなった。

童話の研究会は、花岡が勤務する大淀高校の教室を借り、それぞれが持参した原稿を朗読し合うという形で進められていた。

しばらくして、同人たちの作品をまとめた冊子「奈良児童文化」を発行し、メンバーの消長などをきっかけに、同人冊子は「近畿児童文化」に変わった。そういった活動の中で川村は、「児童文学とは、子どもから大人まで、全ての人たちにとつても文学である」という思いを強くする。

自身の文学の舞台を紀伊半島に置くことにした理由を、「五條は紀伊半島のへそだから」と語ったが、紀伊半島の長い歴史の中に、人々の記憶と共に消えてしまつてはならない物語

があることに気づいたからであろう。

ダム建設のために、川底に沈んでいく村の話。古式捕鯨の村。入江を本拠地としていた海賊たちのこと。戦争の時代を過ごした子どもたちのこと。山の王者である猪と、猪を撃つために命をかけた老猟師。豪雨で村が流され、北海道に移住した人々の苦難の道のり。縁日の屋台の並ぶ街の風景。そして、牛と共に暮らし、共に働く山麓の農家の子どものこと。

子どもの視点に高さを据え、子どもにも理解できる言葉を使いながら、しかも、大人の文芸として遜色のない文章力と構成力を持つ作品を書くために、地域に腰を据えた取材に時間を惜しまず、事実裏打ちされた真実をびたりと捉えようという努力が始まる。

取材は、名刺一枚を差し出して、人に話を聞くことから始まった。当時は国鉄と呼ばれたJR和歌山線と路線バスを乗り継ぎ、歩き、土地の人たちと夜更けまで語り合った。書斎に戻ると、コクヨB四判の原稿用紙の台になっている厚紙に、物語の構想図を描いた。

登場人物。その年齢。職業。家族。友人。プロット。……幾つもの項目と人間の相関図が、鉛筆や、ボールペンや、赤と青の色鉛筆で書き込まれ、それが物語の設計図となった。何パターンかの完成した一枚の設計図は書き物机の前にピンで止められ、書きながらいつでも、確認できるようにになっていた。

設計図が出来上がると次は、分厚いA罫の大学ノートに、

インクは注入式のモンブランで文章を書いていく。色は決まってブルーブラック。一つの物語の完成までに、何冊ものノートが使われた。

ノートの上に完成稿がまると、それを原稿用紙に清書するが、気に入らなくなると、何百枚もの原稿ができた後でも書き換える。それが、川村たかしという作家の「作法」であつた。

こうして川村は、生涯を児童文学に捧げていくことになる。子どもたちを愛するまなざしが、その後の川村の作家活動の原点であつた。

先生として初めて学校に赴任した日、まだ学生服の川村は、春休みでまだ生徒たちが来ていない教室で、その第一歩を踏み出していた。

―「ひとりの牛」―

（『先生がいて牛がいて』より）

川村たかし

春休みの校舎はむーんと乾いて静かだった。とある教室の前まで来て、案内のS先生は「さあ」と促す。ふみこむと新築間もない木造校舎の香ばしい匂いが、いつそう濃密になった。カーテンをしめた教室にはびっしりと机が並んでいた。

「ここが先生のクラスです。五年二組、五十二人がいます。」先生がぼく自身であることに気づくまでに、ちよつと時間がかかった。そうか、とうとう教師になったのか。

第二節 戦後の文学・文芸活動

五條は、古代から各時代を通じて優れた文学が生まれた土地であり、戦後から現代に至っても文学活動は活発に行われてきた。

江戸時代の庶民文化が育んだ俳句、川柳。『万葉集』の時代より尊ばれてきた短歌。そのほか小説、随筆、児童文学、漫画、映画など、五條の文学・文芸活動はさまざまなジャンルにおいて優れた作品を生んだ。

一 俳句の活動

明治三十年に正岡子規の提唱により、柳原極堂が主宰となって創刊した俳誌「ホトトギス」は、五條の俳句文化にも大きな影響を与えた。大正の末には「宇智ホトトギス会」が生まれ、戦後には、江戸期からあった「金芳社」の流れを引く「吟芳銀社」と合流して「五條俳句会」と改称。五條に俳句を楽しむ文化の土壌を作った。

同会の発行した句集『宇智野』第一輯（昭和二十三年十月十日発行）の巻頭には、「ホトトギス」派俳人で、「かつらぎ」を主宰した阿波野青畝の句が掲げられている。

宇智野よし 恵方詣を いたすべし

戦前から五條の俳句界を牽引した郷土の俳人中村左兵子の書いた「はしがき」には、俳句を楽しむ町の人々の姿が見える。

―宇智ホトトギス会も既に二十余年の歩みが続けて来た。顧みて誠に感慨深いものがある。大正の末期、当時敏水と号して月並俳句・新傾向俳句等に彷徨してゐた古川治平君が翻然迷水と改号してホトトギス派の俳句に帰趨を決し、起つてその旗幟を明らかにされるや、夙より独り超然とホトトギスに精進してゐた句入道、月並俳句にあきたらず懊悩してゐた俱子・左兵子・早茅等期せずしてこゝに相集まつて一團をなしたのであった。時偶々、高濱虚子先生関西方面に杖を曳かれることあり、此の機逸すべからずと懇請して先生をこの地に迎へ、晩春花既に遅き一日を栄山寺の古刹に句薙を開き得た。（中略）

殊に迷水は自ら俳句業と高称して之に没頭するの情熱を示したため一同翕然として之に同じ、俳風頓に旺然たるものがあつた。（中略）

以上のやうな経緯で、我が宇智ホトトギス会は生れた。そしてそれ以来、昭和九年頃まで、多少の消長はあつたが順当の歩みが続けてきたのである。其の間、来り会するもの、古川迷水を首めとして、杉崎句入道、香久山俱子、中村左兵子、谷田早茅、三木杜雨、藤原虚栗、酒井不去子、前木せうぶ、植田栄月、小谷虚水、今西桃里、辻本幸代、山本きぬ等であり、珍客よく来つて波紋を点じたるものに赤阪藤園、瀬野直堂、松浦真青、三星山彦、二宮杜泉等があつた。（後略）―

五條には江戸期から五條に続いている「金芳社」句会があったが、香具山俱子、亀田桃牛、宮原季夫（香甫）、森本桃林、芳田弘明、松浦眞青らが参加して各派合流の「吟芳銀社」が結成された頃、昭和二十年六月、「ホトトギス」同人の俳人で、戦前の内務官僚（佐賀県・和歌山県・熊本県知事を歴任）であった藤岡玉骨（本名・長和）が五條に帰還する。

玉骨は「吟芳銀社」と「宇智ホトトギス会」の両者を指導するが、後に玉骨を軸に二つの結社がまとまり「五條俳句会」となった。

昭和二十一年、藤岡玉骨は毎日新聞「大和俳壇」の選者となる。

昭和三十七年、玉骨は、俳句による文化活動により、奈良県文化賞を受賞。

玉骨との結びつきによって、五條を訪れた著名な俳人も多い。藤岡玉骨邸（五條市近内町の「藤岡家住宅」）には、高濱虚子の率いる「ホトトギス」派俳人のほか、正岡子規の高弟で虚子と並び称された、河東碧梧桐の短冊なども残されている。

高濱虚子ら「ホトトギス」派の俳人一行二十六名が玉骨邸に宿泊して句会を催し、長谷寺（奈良県桜井市）本尊十一面観音像のご開帳を訪ねた際の句帳「春のちり」には、各参加者直筆の句がある。高濱虚子、阿波野青畝、後藤夜半、五十嵐晚翠、高濱年尾、星野立子、真下喜太郎、鈴鹿野風呂、大橋桜坡子、皿井旭川、平松いとど、松尾いはほ（巖）、野

村泊月、本田一杉、岩木躑躅。この内、高濱年尾は、虚子の長男で次期ホトトギス主宰。真下喜太郎は、虚子の長女真砂子の夫で「明星」同人でもある。星野立子は虚子の次女。虚子一家と玉骨との親しい交流を示す資料でもある。

― 五條に建つ句碑（戦後の資料より） ―

・堀家（西吉野町賀名生）邸内に、阿波野青畝の句碑

・南朝の 末の末とし 鯉幟

・華蔵院跡（西吉野町賀名生）に、「倦鳥」を主宰した大阪の俳人、松瀬青々の句碑。

梅の花 寒し南朝 五十年

・奈良時代の宝亀年間に彫刻された宇智川磨崖碑（小島町）の川へ下る坂の入り口に建つのは、五條の俳人、香久山俱子の句碑。

結縁の 磨崖仏へと 露の径

・五條市立五條東小学校前に、五條の俳人、亀田桃牛の句碑。

誰が出て 臘と云ひし 冬の月

・榮山寺（小島町）に藤岡玉骨の句碑

山巡り 巢を守る雉子 翔たせつつ

昭和三十二年、かつらぎ社・大和俳句会による建立

・登録有形文化財「藤岡家住宅」

涉り石 涉りためらひ 梅仰ぐ

平成二十年、五條ロータリークラブによる建立

・近内町御霊神社お旅所

大杉の 下祓戸の 神仰ぐ

第三節 町と物語の関係

はじめに

五條市の口承文学について総論するにあたって、口承文学とはそもそも何か、ということに目を向けた。文字ではなく、語りによって伝えられるものが主ではあるが、同じ内容が文書として記録されたり出版されたりして伝播する場合もある。本書で扱っているものは特に文書として伝わって来たものが多い。いわゆる「昔話」や「伝説」と呼ばれるような話で、もともとは誰か（例えば大人）が別の誰か（子どもや他の人）に語って聞かせるものである。

内容は、地域に伝わる偉人のことであつたり、不思議なことであつたり様々であるが、いずれにせよ、その土地に根付いたものであつて、「あの山のこの石の前に」といったような具体的な場所が示されている。つまり、今我々が生きている町の、どこかに流れ、漂っている物語である。「むかしむかし、あるところに」の「あるところ」が「この近所に」となっているわけである。

ところで、誰かが伝承を語り始めるとき、その人物は語り手として「場」に存在し、聞き手は「場」に参加するということ、ある種の演劇的な空間が立ち上がる。語り手は、文化によつては特定の手順を持っていることもあり、「むかし、むかし」という定型の言葉を使うのも、そういった手順の一つでもあ

る。彼（もしくは彼女）は今から語る物語に対して、物語の内容や雰囲気、「場」を支配する特権的な立場にある。物語は、語り手が誰であるかによつて、性質が左右されるのである。以上のような理由から、物語に触れる場合は、誰が誰に對して語っているのかは特に重要な要素である。

その意味において、本書に収録した『昔話と世間話 昔話——研究と資料——第十四号』、並びに『昔話と伝説 昔話——研究と資料——第十五号』は非常に興味深い資料である。丸山顯徳^{のり}氏が五條市大塔町（旧大塔村）に伝わる口承文学を住民から直接採集した資料である。語り手となった村の人々の言葉遣いや方言をそのまま記録している他、出身地や家族構成、伝承を誰から伝え聞いたなどといった、語り手のバックグラウンドに関する調査も行われている。本書ではさらに、旧大塔村時代に村役場によつてまとめられた『大塔村史』を参照し、五條地域の伝承に新たなものを加えた。五條市西吉野町（旧西吉野村）のものについては、『西吉野村史』から引用した。

書籍として発行された伝承の多くは、採話され、現代でも読みやすいように書かれたものがほとんどであり、どのような語り手が如何に語ったかについては明確ではない。旧大塔村や旧西吉野村の役場で編纂された『大塔村史』と『西吉野村史』に記載の伝承は、各地域における語り口調ではなく読みやすさを重視して記されている。そのため、語りという点では資料の質に差異があることは否めない。しかし、五條市の伝承として、旧五條市のものに新たな資料が加わったこと

で、内容のバリエーションが増えた。後述するが、大塔町、西吉野町、旧五條市の間では、伝承から見える風景の印象に大きな差があり、地域ごとに読み比べてみるのも興味深いだろう。本稿では、五條市に伝わる伝承を、同一の登場人物や事象が、異なる地域でどのように語られているのか、という点を中心に概観し、五條市に共通した特徴、あるいは各地域に特有の伝承の在り方を捉えてみたい。

一 伝承の読み方

本書に収められた伝承は、どのように読まれるべきだろうか。ここに登場する「キャラクター」たちは弘法大師（空海）や井上内親王、後醍醐天皇といった、歴史上に実在した人物から、河童や狐、幽霊のようなファンタジーとも捉え得る存在に至るまで様々である。内容も、「〴〵の起源」であったり、親が子どもに教えた教訓であったりする。そのため、読み方は無数にある。例えば、どのような話とその類話が五條市各地域に如何に分布しているか、などが一般的な分析方法である。しかしながら、伝承の分布だけを見ると、各地域の特色が他の全国的な伝承のマクロな体系の中に取り込まれてしまうという面もある。よって本節では、特に登場人物の個性や内容の、より特徴的な部分に焦点を当てて、旧五條市、大塔町、西吉野町それぞれの伝承を見渡してみたいと思う。五條市の伝承に登場するキャラクターたちは、現代の視点から見ても魅力的である。

なお、本節で取り上げる伝承は、既刊の『五條市史』と本書で新たに収録した『西吉野村史』、『大塔村史』、『奈良縣宇智郡誌』、『昔話と世間話 昔話―研究と資料―第十四号』、『昔話と伝説 昔話―研究と資料―第十五号』に掲載されたものから一部抜粋・要約している。詳しい伝承の内容に関しては、前述の資料を収録した頁をご参照頂きたい。

（一）主な登場人物たち

山中の乙姫様

西吉野町は、山間部にあるが、乙姫が登場する伝承が複数見られる。乙姫と言えば、一般的に「浦島太郎」伝承の登場人物として広く知られている。海の底の竜宮城に住み、浦島太郎に玉手箱を渡したというイメージが強いと思われる。そのため、海がない奈良県において乙姫伝承が伝わっているのは非常に興味深い。

五條市における乙姫伝承の舞台の一つは、西吉野町大日川である。「乙姫淵」と呼ばれる淵で鉦を落とした人物が、淵の底にある竜宮に行き、自分の鉦が床の間に飾られているのを見たというのである。さらに乙姫からは、玉手箱を受け取るのではなく、早魃への対処法として淵をかき干すれば良いと教わって帰ってくる。この方法は、明治時代の雨乞いの際に用いられたという話も伝わっている。ちなみに、竜宮から帰ってきたその人物は、身なりが浦島太郎のようになってしまっていたそうである。

執筆者一覧

- ・川村^{かわむら} 優理^{ゆり}（藤岡家住宅館長）
 - 第2章 第1節 中世の五條と文学
 - 一 中世五條の武士を語る軍記物（補訂）
 - 二 中世五條を語る説話
 - 三 中世五條を詠んだ和歌
 - 第4章 第1節 川村たかしの文学活動
 - 第2節 戦後の文学・文芸活動
- ・平林^{ひらばやし} 章仁^{あきひと}（日本文藝家協会会員）
 - 第1章 第1節 神武天皇東遷伝承と阿陀の鵜養
 - 『古事記』・『日本書紀』の中の宇智郡—
- ・阪口^{さかくち} 由佳^{ゆか}（奈良県立万葉文化館主任研究員）
 - 第1章 第2節 『万葉集』からみる五條
- ・岩倉^{いわくら} 哲夫^{てつお}（橋本市文化財保護審議会委員）
 - 第2章 第1節 中世の五條と文学
 - 一 中世五條の武士を語る軍記物（原案）
- ・大橋^{おおはし} 正叔^{ただよし}（天理大学名誉教授）
 - 第2章 第2節 五條を描いた近世文学
- ・太田^{おおた} 登^{のぼる}（天理大学名誉教授）
 - 第3章 第1節 藤岡玉骨をめぐる文学活動を中心に
- ・川村^{かわむら} 明日香^{あすか}（博士（言語文化学））
 - 第4章 第3節 町と物語の関係

協力者及び写真提供者一覧

（順不同、敬称略）

NPO 法人うちのの館（藤岡家住宅）	さかい利晶の杜
株式会社偕成社	櫻井寺
株式会社ポプラ社	奈良県立図書情報館
公益社団法人奈良まちづくりセンター	与謝野晶子倶楽部
御霊神社（五條市近内町）	

委 員 一 覧

(令和6年3月31日現在)

【五條市史編纂委員会】

委員長	松田	真一	(天理大学附属天理参考館顧問)
副委員長	谷山	正道	(元天理大学教授)
委員	川村	優理	(藤岡家住宅館長)
委員	林	良彦	(元文化庁主任文化財調査官)
委員	西本	久雄	(五條市市長公室長)
委員	櫻本	茂樹	(五條市総務部長)
委員	名迫	雅浩	(五條市教育委員会事務局教育部長)

【五條市史編集委員会】

委員長	谷山	正道	(元天理大学教授／近世部会長)
副委員長	浦西	勉	(元龍谷大学教授／民俗部会長)
委員	井岡	康時	(奈良大学文学部教授／近代現代部会長)
委員	川村	優理	(藤岡家住宅館長／文学文芸部会長)
委員	神田	雅章	(龍谷大学文学部教授／美術工芸部会長)
委員	林	良彦	(元文化庁主任文化財調査官)／建造物部会長)
委員	松井	淳	(奈良教育大学理科教育講座特任教授／地理環境部会長)
委員	松田	真一	(天理大学附属天理参考館顧問／考古部会長)
委員	吉川	真司	(京都大学大学院文学研究科教授／古代中世部会長)

【文学文芸部会員及び調査員】

部会長	川村	優理	(藤岡家住宅館長)
部会員	岩倉	哲夫	(橋本市文化財保護審議会委員)
部会員	太田	登	(天理大学名誉教授)
部会員	大橋	正叔	(天理大学名誉教授)
部会員	阪口	由佳	(奈良県立万葉文化館主任研究員)
部会員	平林	章仁	(日本文藝家協会会員)
部会員	丸山	顯徳	(花園大学名誉教授)
調査員	川村	明日香	(博士(言語文化学))

事 務 局

五條市教育委員会事務局 文化財課 市史編纂室

新五條市史 文学文芸編

令和6（2024）年3月31日 発行

令和7（2025）年6月30日 第2版発行

編 集 五條市史編纂委員会

五條市史編集委員会

編 集 事 務 五條市教育委員会事務局 文化財課 市史編纂室

〒637-0091 奈良県五條市北山町930番地の2

市立五條文化博物館内

電話 0747-24-2011 FAX 0747-24-2010

Eメール bunkazai@city.gojo.lg.jp

発 行 五條市

〒637-8501 奈良県五條市岡口1丁目3番1号

電話 0747-22-4001（代）

<http://www.city.gojo.lg.jp>

印刷・製本 株式会社 笹田印刷所

〒639-2245 奈良県御所市大字今住16番地の3